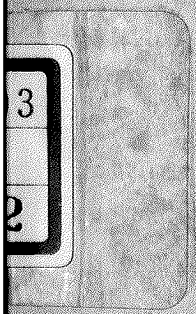


男

鋼道路橋設計示方書 鋼道路橋製作示方書 解説

社団法人 日本道路協会



序

最近の自動車の大型化の傾向は、其の総重量が飛躍的に増加しただけでなく、軸重、輪荷重共に増大して、道路構造、特に橋梁構造を再検討する必要を生じ、又橋梁技術の進歩、橋梁材料の質の向上にも目ざましいものがあり、現在用いられている鋼道路橋設計示方書を改訂すべき事は、すでに数年前から要望されて居たのである。昭和 28 年に本協会に設けられた、鋼道路橋設計示方書作成委員会は、青木委員長の下に、我が国の橋梁の権威者を網羅して、3 年に亘り、実に 59 回におよぶ委員会を開催して慎重な審議をすゝめ、その間、我が国の資料は勿論、広く諸外国に資料を求め、又、多くの計算と試験、研究を行い、遂に此所に成案を得たのである。従つて、此の鋼道路橋設計示方書、製作示方書およびその解説は、今後の我が国の道路橋の設計、製作に、正しい権威ある指針となると共に、更に将来の橋梁技術の進歩に正確な方向をあたえる基盤となるであろう事を信じて疑わない。

我が国のあらゆる橋梁の権威者と、次代を担う若い橋梁技術者の経験と、知識と、努力と、そして多くの労力と時間とが、此の冊子のかげに、うずたかく積まれている事を記憶し、此の示方書および解説を活用されると共に、更に将来の橋梁技術進歩への努力を、全国の橋梁技術者に期待したいのである。

云うまでもなく技術は、常に前進し、絶えず新しいものを創つて、止まる時がない。此の示方書もやがて再び改訂される時が来るであろう。その時まで、此の示方書により設計され、製作され、架設された橋梁が次代への問題を生み、新しい資料を創り、その累積が、新示方書を生む貴重な基礎となるのであるが、その為には、設計者も、製作者も、施工者も、此の前進と創造を常に意識し、現在の橋梁を完成すると共に、将来への資料を積み上げる事に協力すべきであろう。

“花から実へ、実から花へ、そして再び花から実へ、技術は、このようにして、より美しい花を咲かせ、より堅実な実を結んでゆく。

そして、それを培うものが技術者なのである。”

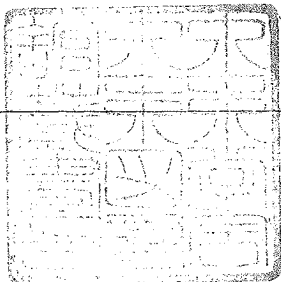
と、此の書の序にも、付け加えたいと思う。

昭和 31 年 5 月

日本道路協会会長 岩 沢 忠 恭

鋼道路橋設計示方書作成委員会

委員長 青木 楠 男	委員 佐藤 寛 政
委員 福田 武 雄	同 高野 務
同 成瀬 勝 武	同 田原 保 二
同 平井 敦	同 片平 信 貴
同 奥村 敏 恵	同 大串 満 馬
同 友永 和 夫	地方委員 今 俊 三
同 滝尾 達 也	同 樋浦 大 三
同 鈴木 俊 男	同 小西 一 郎
同 尾崎 義 一	同 安宅 勝
同 田中 五 郎	同 鷹部 屋 福 平
同 富樫 凱 一	同 中島 武



登 録	昭和40年 5月 5日
番 号	第 221 号
社団法人	土 木 学 会
附 属	土 木 図 書 館

昭和 31 年 5 月 10 日 印刷

昭和 31 年 5 月 15 日 発行

定 価 200 円

編 集 日 本 道 路 協 会

印 刷 株 式 会 社 技 報 堂

東 京 都 港 区 赤 坂 溜 池 町 5

発 行 社 団 法 人 日 本 道 路 協 会

東 京 都 千 代 田 区 三 年 町 1

振 替 東 京 116779